



ケニア理数科教育強化計画プロジェクト(SMASE)で、手作りの理科教材作成に挑戦する教員たちにアドバイスを送る

「授業次第で、子どもたちの姿勢はこんなに変わるものなんだ」。JICAの支援を受けて初等理数科教育の強化に取り組むケニアで、ある教員が感激しながら話してくれました。教科書の内容を一方的に伝える従来の方法に代わり、子どもたちが主体となる新しい授業を実践したときのことでした。子どもたちの変化や成長を実感したこの出来事をきっかけに、教員たちは「より良い授業を」と指導力の向上に励むようになりました。私たちが伝える日本式の理数科教育は、高度経済成長を支

より良い理数科教育をアフリカに

えた優れた人材の育成に大きく貢献してきました。私は以前、日本の小中学校で教員をしていましたが、そこで培ったノウハウは、現在の活動にとっても役立っています。ケニアは2030年までに科学技術立国の実現を目指しています。また、サハラ以南アフリカの各国は、紛争や貧困から立ち直り発展への第一歩を踏み出すため、理数科教育に力を入れています。そうした国々の未来に向けた取り組みに貢献できるということは、私の大きなやりがいです。理数科教育は、科学的で客観的なものの見方や考え方、判断力、創造力などを養う大切なもの。それはまさに、未来の国づくりへとつながっているんです。



JICA専門家(理数科教育)
内山 葉月 氏

「長年の紛争のつめ跡が色濃く残る東ティモールでは、国の復興と発展のカギを握るはずの高等教育が大きく遅れています。私は2003年から、唯一の国立高等技術教育機関、東ティモール大学工学部に対するJICAの支援に、プロジェクトリーダーや短期専門家としてかかわってきました。当時は教員の3人に1人が、中等教育レベルの数学や物理すら身に付いていないような状況で、とても驚いたのを覚えています。

紛争後が終わり、この国には国際機関や各国の支援が多く入ったため、「誰かが助けてくれる」という考え方が国全体に広がっています。大学の現場でも、教員たちに「国を担う人材を育



埼玉大学 地圏科学研究センター 客員教授
風間 秀彦 氏

新しい国づくりのために



東ティモール大学工学部の教員に、基礎的な実験の指導を行う風間客員教授

てるのは自分たちだ」という意識はほとんど見られませんでした。そこで10年近い年月をかけて行ってきたのは、指導力の向上やカリキュラムの整備といった実務的なことに加え、教員の研究意欲を高めたり、学部運営に積極的に関与するよう促す「意識改革」です。最近は能力のある若手の教員や学生も増え、少しずつ新しい国づくりの芽が出てきているのを感じます。いつの日か、彼らが日本の大学と共同研究するくらいまでに成長し、国の発展に貢献して欲しいと願っています。

「知」と「人」を 育てる日本人

高等教育支援の最前線で活躍する、日本の研究者や専門家たち。

その国の未来への期待を一身に背負いながら、奮闘を続けている。

特集
科学技術 ● 高等教育
育て! 未来のエンジニア



モンクット王工科大学ラカバン校・通信情報技術研究センターで、学生の研究を指導する濱本教授

これまで、タイのモンクット王工科大学ラカバン校・通信情報技術研究センターでの研究指導や、ラオス国立大学のIT技術者の育成などに携わってきました。

そこで痛感したのは、高等教育を根付かせていくためには、自国の有望な若者を育てる優れた教育者の養成こそが、最も重要だということ。ただ日本の教員が現地へ赴き、学生に教えるだけでは意味がない。現地の教員の手で、各分野の発展をリードしていく人材を末永く輩出できるようになるのが、私たちの

築いた信頼関係は大切な財産

支援の大きな目的の一つだと考えています。初めは成り行きでかかわることになった途上国での活動ですが、今ではライフワークの一つとも言えるほど、やりがいを感じています。私が現地で指導する教員や学生たちの集中力はとても高く、その吸収の早さにはいつも驚かされます。日本での指導や研究との両立は大変ですが、大きな可能性を持つ国々で、彼らと一緒に何かに取り組めるというのは、私自身にとって大きな財産となっています。単なる協働や異文化交流の枠を超えた、人間同士の濃い付き合いの中で築いてきた彼らとの信頼関係や友情は、これから先も変わらないでしょう。



東海大学 情報通信学部
情報メディア学科教授
濱本 和彦 氏

「インドネシアやベトナムの工科大学で、研究開発の促進、高等教育機関の教員育成などを行うJICAの支援に、主にプロジェクトリーダーとして携わっています。

その中で気付いたのは、こうした国々では教員や学生の意欲、能力が非常に高く、日本の大学が見習うべき点が多くあること。研究環境が十分でないにもかかわらず、学生たちは目を輝かせて研究に打ち込み、教員たちもその気持ちに応えようと、全力で指導に当たっています。その真摯な姿勢には、素直に頭が下がる思いです。

私がJICAの支援に参加する日本の大学の先生方にいつも



熊本大学大学院 自然科学研究科教授
宇佐川 毅 氏

パートナーとして向かい合う



インドネシアの学生たちに囲まれる宇佐川教授

願っているのは、「先生と弟子」といった関係ではなく、「パートナー」として、現地の高等教育機関の関係者たちと向き合ってほしいということ。その結果、協力期間が終わっても、研究者同士、教育者同士の結び付きやネットワークが生まれ、さらなる共同研究や研究協力につながることもあります。私が「参加して良かった」と実感するのは、まさにそんなときです。そうした成果の積み重ねこそが、次代を担う人材を生み出すための土壌となっていくのだと思います。